

中国語母語話者による母音長の知覚と産出の関係

張 格格 (横浜国立大学大学院)
foamofthedream@gmail.com

1. はじめに

日本語学習者の特殊拍の問題に関する研究は昔から、多くの研究者たちによって様々な視点から研究がなされている。これらの研究が長く続けられている原因としては、特殊拍は独立した拍を形成しながらも、独立した音節を形成しないということが挙げられる(窪菌 1998)。つまり、長さとしての自立性を持っているが、単独では音節にならないと考えられる。また、学習者の習得状況について、知覚判断に曖昧な領域が広くて、長音と短音の知覚範疇化が進んでいない学習者は上級になっても存在する(戸田 1998b)。そのため、学習者の日本語の特殊拍を把握しにくいと考えられる。

日本語学習者としての筆者の経験でも、また周りの学習者から聞いた話でも、まず長音・短音の長さの問題について、先生からの指導がほとんどなかった。そして、長音については、聞くときに、弁別できるが、話すときには長かったり、短かったりしてしまうことがある。逆も同じく、言うときには正しく言えるが、聞くときに、長音を脱落して聞く。また、長音がないときに、長音に聞こえてしまうこともある。そのため、母語話者とコミュニケーションするとき、それが意図伝達の障害となり、誤解を招く可能性があると考えられる。このような問題があるときに、産出や知覚をそれぞれ練習すれば良いのか、それとも聞く話すを一緒に練習できるシャドーイング練習をすれば良いのか、練習方法がわからない。

本研究では、このような原因を踏まえ、長音を中心に、中国語を母語とする日本語学習者の自然発話の音声データと聴取テストの結果をもとに、聞き分ける能力と言い分ける能力の状況を分析し、その関連性を考察することを目的とする。

2. 先行研究

小熊(2008)は、初級、中級、上級、超級の英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、インタビュー形式の自然発話を分析し、発話リズムの不自然さの全体的な傾向を検討した。その結果、全体的な傾向として、拍の増加、拍の減少のうち、短音が長音に聞こえる、長音が短音に聞こえることの数突出して多いことが観察された。その中、中級・上級学習者の不自然さの数が初級・超級学習者より多いことが見られた。さらに、日本語能力が上級レベルの学習者や上級レベル以上の学習者の発話に対しても指摘が多く、母音を短く聞こえるように産出することは習得が難しいことが推測される。

山田(1999)では、日本語を母語とする英語学習者成人 10 人を対象として、英語/r/と/l/のペアの聞き分ける練習をして、訓練前に約 7 割程度だった正解率が、訓練後のテスト

では約9割まで上昇し、訓練で使われなかった単語や、訓練で用いなかった人の声でも9割程度聞き取れるようになった結果が見られた。さらに、リスニングの訓練しか行わなかったにもかかわらず、発音にも進歩があることが観察された。つまり、英語の場合には、知覚能力と産出能力の間には一方の上昇につれ、もう一方も上昇するという相関関係があると考えられる。

3. 調査方法

3.1. 実験参加者

中国語を母語とする、日本語中級学習者5名、上級学習者5名（20～30代）を対象者とした。中級学習者は全員日本語能力試験N2の合格者で、日本の日本語学校に在籍している。上級学習者全員が日本語能力試験N1に合格し、中国の大学で日本語を専攻とし、来日前に4年以上の日本語学習歴を有している。現在、日本の大学院に在籍している大学院生である。対象者の音声評価に参加する日本語母語話者4名（20～40代）は全員日本語教師である。

3.2. 知覚調査

学習者の知覚能力を測定するために、学習者の既習知識に影響される可能性があると考えられる、無意味語の長短音の弁別聴取テストを行った。そして、母音の無声化が学習者にも影響を与えるので、それを考慮した上で、弁別テストの内容として、無意味語のミニマルペア、4種（AB・AB―/AB・A―B/AB―・A―B―/A―B・A―B―）、各12ペア、計48ペアを用いた（表1に弁別テストに用いた無意味語ペアの例を示す）。単語内にアクセント型が学習者の弁別に影響を与えられると考えられる（皆川 1995a; 1997）。そのため、無意味語をそれぞれの語を平板型で読み上げることにした。

音声モデルを作成にあたって、東京語母語話者（男性、20代）が無意味語リストにある96語をランダムで、それぞれ3回読み上げ、録音し、音声モデルを作成した。

作成した音声モデルを対象者に聞かせ、4つの選択肢から強制選択させた。繰り返し3回、計288語を解答用紙に記入してもらった。

表 1: 弁別テストに用いた無意味語ペアの例

	AB・AB―	AB・A―B	AB―・A―B―	A―B・A―B―
1	のま・のま―	さそ・さ―そ	せて―・せ―て―	れ―ま・れ―ま―
2	はよ・はよ―	さね・さ―ね	まも―・ま―も―	へ―け・へ―け―
3	ぬも・ぬも―	らも・ら―も	もね―・も―ね―	な―と・な―と―
...

3.3. 産出調査

自然状況の発話モデル中の産出能力を測定するために、対象者に1分間以内に自由発話をさせ、録音した。その際、対象者自身の関心や興味を持っている内容をテーマにした。発話を中断しないように、メモやキーワードなどを書いておいた。

自由発話の録音データについて、日本語母語話者が話者の意図の理解と意味不明な単語があるかどうか、もう一つは発話の中に、母音の長・短の問題があるのかという二つの側面から評価し、1～5の範囲の点数をつける。(1：全然できていない；5：母語話者レベル)

4. 結果と考察

4.1. 知覚能力

本研究の調査結果について、まず、学習者の知覚能力を測定する母音長の弁別テストの結果を図1、図2に示す。上級学習者全体の平均誤答率は12.7%である一方、中級学習者は39.9%であり、中級学習者と上級学習者の間には顕著な差が見られた。上級学習者になって、誤りの減少が見られることから、学習者の日本語の習熟度の向上に従って、知覚能力も上昇すると考えられる。

4.2. 産出能力

対象者の自由発話について、アクセントやイントネーションなどの音声要素を除き、母音の長短だけを分析対象とした。その結果を図3に示す。中級学習者と上級学習者の間に、知覚能力のような大きな差がなかったと言える。しかし、日本語母語話者により、発話の全般的なイメージとして、上級学習者の方は自然である一方、中級学習者の発話は全体的に不自然な部分が多いと考えられる。

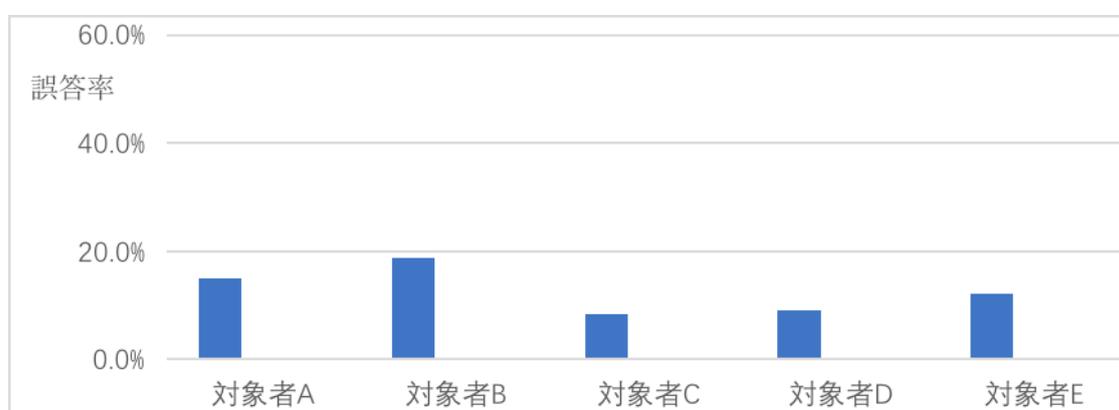


図 1:上級者の弁別テストの誤答率

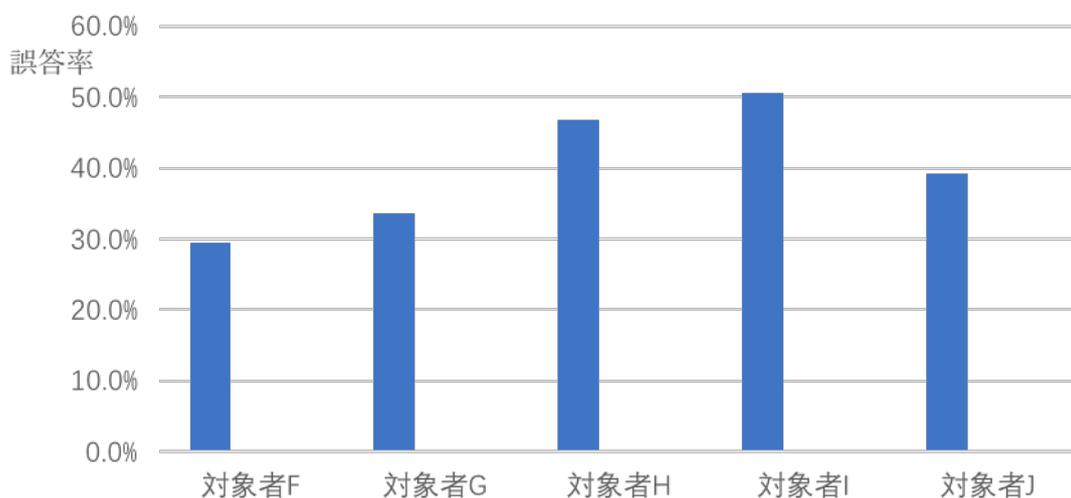


図 2:中級者の弁別テストの誤答率

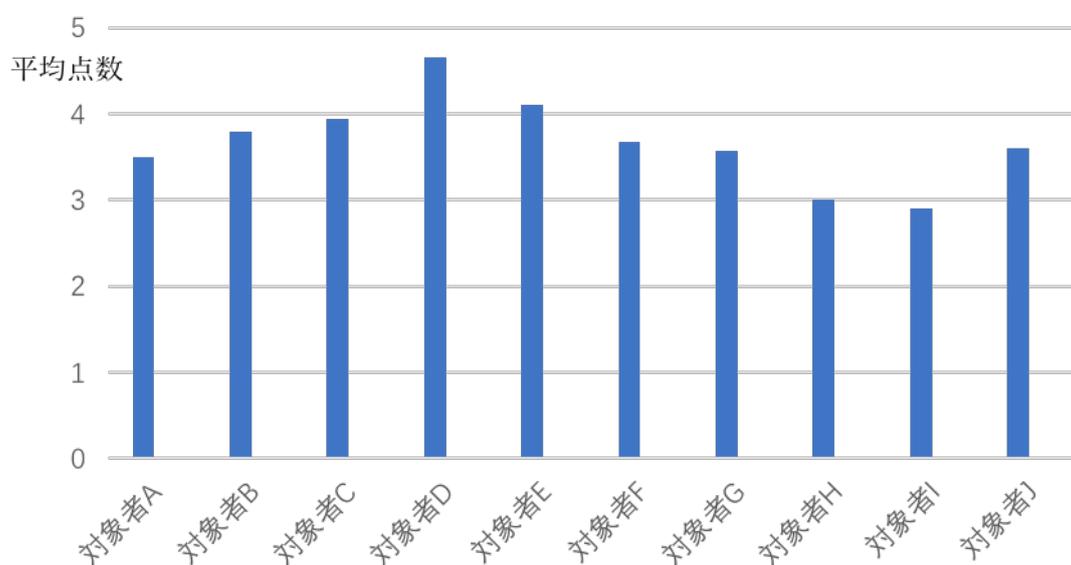


図 3:産出能力の平均点数

4.3. 知覚能力と産出能力の相関

図 4 に知覚能力と産出能力の相関を示す。学習者の日本語習熟度の上昇に従い、産出能力と知覚能力の間に正の相関関係があると考えられる。しかし、個人差によって、正の相関関係があると判断できない状況もあると考えられる。

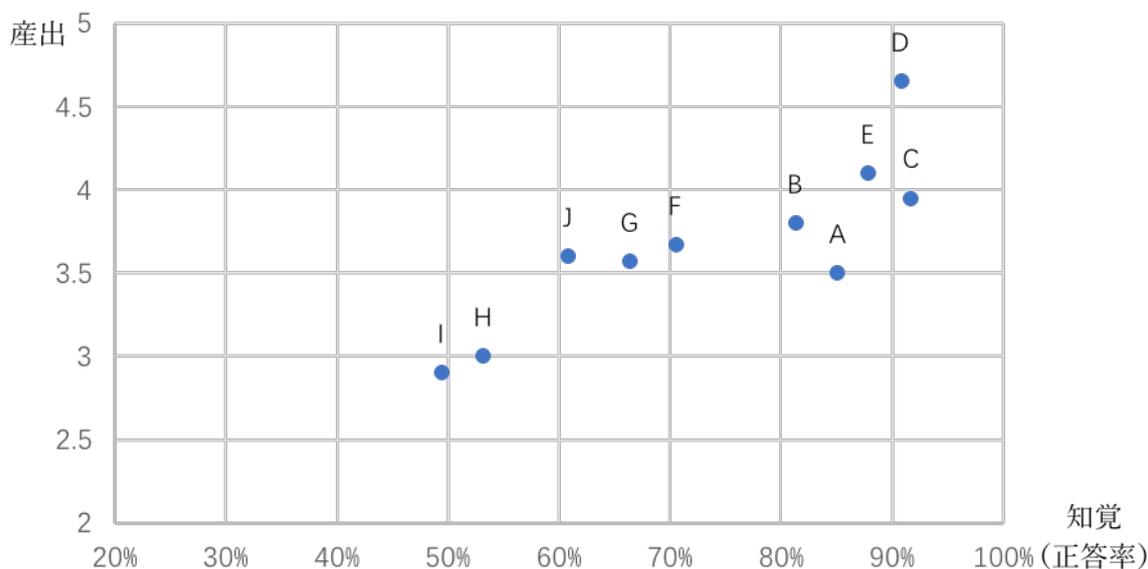


図 4：知覚能力と産出能力の相関

5. 終わりに

本研究では、中国語を母語とする中級・上級日本語学習者の母音長短の知覚能力と産出能力を測定し、二つの能力の相関関係について検討した。知覚に関しては、中級学習者と上級学習者の間に激しい差が存在しているのに対して、産出に関しては、今回対象者となる中級・上級学習者の発話は、長音・短音の誤用があるにもかかわらず、意思疎通上の問題になっていない。つまり、長音を短くしてしまい、または、短音を長く発音してしまう場合でも、母語話者が理解できる範囲の中にあると判断できる。上級者を分析したところ、個人差により、知覚の問題になるパターンは、正しく産出できることが観察された。現段階では、多少ばらつきがあるものの、概観すると、言い分ける能力と聞き分ける能力の間に正の相関関係があると考えられる。しかし、個人差によって、正の相関関係が観察できない状況もあると判断したため、今後、調査人数を増やし、知覚能力と産出能力の相関を明らかにしていきたい。

参考文献

- 皆川泰代(1995a)「日本語学習者における長音知覚の諸要因：英語・韓国語話者の場合」『平成7年度日本音声学会全国大会予稿集』52-57.
- 皆川泰代(1997)「長音・促音の識別におけるアクセント型と音節位置の要因：韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』123-128.

- 窪菌晴夫(1998)「モーラと音節の普遍性」『音声研究』2:1.
- 戸田貴子(1998b)「日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化」『文藝言語研究言語篇』33.
- ATR 人間情報通信研究所(1999)「完全版 英語リスニング科学的上達法音韻編」講談社
- 小熊利江(2008)『発話リズムと日本語教育』風間書房.